正誤表

『PT・OT のための運動学テキスト 基礎・実習・臨床』（第 1 版第 2 刷，2016 年 1 月 20 日発行）に誤りがございました。

以下のとおり訂正し、お詫び申し上げます。

2017 年 3 月 31 日　　金原出版株式会社

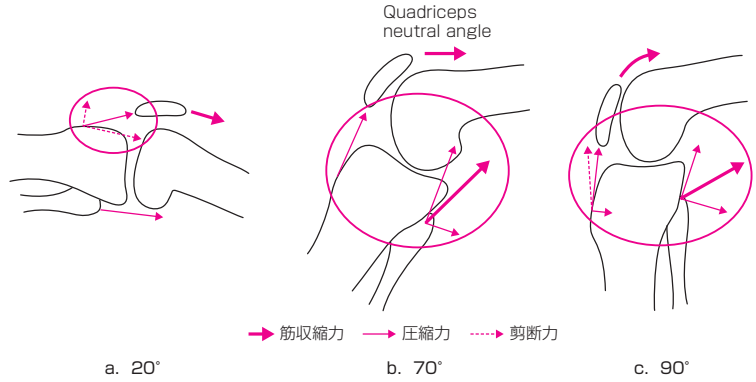
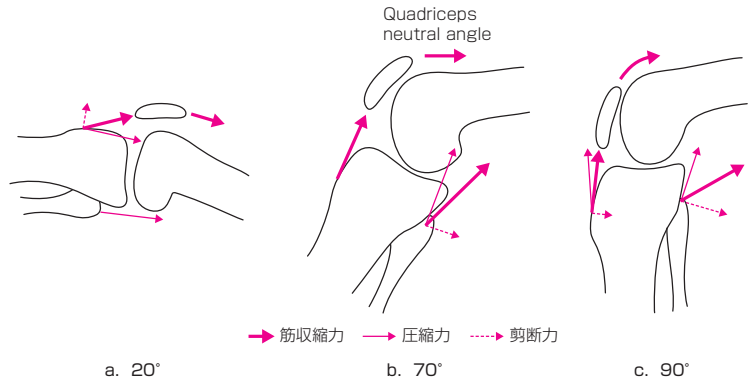
頁	訂正箇所	誤	正
27	図 2 タイトル	膝伸展時の最大筋トルク発揮角度（60°/秒例）	膝伸展時の最大筋トルク発揮角度例（60°/秒）
35	図 8 説明 下から 2 行目	～刺激から筋収縮に至までの流れを示す。	～刺激から筋収縮に至るまでの流れを示す。
53	図 2 説明 6 行目記号	※:P＜0.05，※※:P＜0.01，※※※:P＜0.001	＊:P＜0.05，＊＊:P＜0.01，＊＊＊:P＜0.001
90	E	分析結果の解釈（表 5）	分析結果の解釈（表 1）
98	上から 10 行目	肩甲上腕関節窩は上腕骨頭に比較して	肩甲骨関節窩は上腕骨頭に比較して
98	最終行	胸鎖関節は，上肢帯（肩甲骨）と上肢と体幹を連結する唯一の関節である。骨の鎖骨切	胸鎖関節は，上肢帯（肩甲骨と鎖骨）と上肢と体幹を連結する唯一の関節である。胸骨の鎖骨切
103	図 9b.	肩甲上腕関節	関節上腕靱帯
104	下から 2 行目，最終行	最終肢位は外転と同じために外転の肩甲骨運動と同様の運動が生じる。	最終肢位は外転運動と同じであるため，外転運動とほぼ同様の肩甲骨の運動を伴う。
105	上から 3 行目，4 行目	この setting phase において～と考えることができる。	この setting phase において，肩甲骨が不規則あるいは一定のリズムで運動するとの報告もある 2)。
105	上から 5 行目	およそ 150°以上の上肢挙上において脊柱も運動に加わる。 一側挙上では脊柱の対側側屈を，	およそ 150°以上の上肢挙上においては脊柱もその運動に加わる。 一側挙上運動では脊柱が対側へ軽度側屈し，
109	上から 4 行目	（図には示していない）。	（図 18b）。
109	図 18b.	肩甲下筋上部線維	肩甲下筋中部線維
109	下から 2 行目	肩甲上腕関節の内旋筋である小円筋は，	同じく外旋筋である小円筋は，
109	下から 4 行目	肩甲上腕関節の内旋筋である棘下筋の～	肩甲上腕関節の外旋筋である棘下筋の～
118	文献	文献 1)のあとに追加	2)矢野雄一郎：三次元的解析装置を使用した上肢挙上・下垂時の肩甲骨運動．Dokkyo Journal of Medical Sciences 36：T21～T27，2009.
122	下から 11 行目，12 行目	髄節レベルにおいて，方形回内筋は C6，7 であるのに対して，円回内筋は C7，C8，T1 である。	髄節レベルにおいて，方形回内筋は C6-Th1 であるのに対して，円回内筋は C6，7 である。
125	図 8b.	回内筋群（右，掌側）	回内筋群（左，掌側）
125	図 8b.	矢印の向き（矢頭が右）	矢印の向き（矢頭が左）
134	解説 2 行目，3 行目	そのため肘関節または肩関節の可動域制限によって制限される可能性のある日常生活動作を理解しておく必要がある。	そのため日常生活に必要なリーチ範囲（図 11a～c の 5）には両関節の可動域が必要であり，どちらか一方の可動域が制限されると，同時にリーチ範囲も制限される（図 11a～c の 1～4）。
139	図 5	ワルテンベルク徴候	ワルテンベルグ徴候
141	図 10c 説明	橈骨の前後方向への動き	橈骨の前後方向への滑り
191	上から 6 行目，7 行目	②上後腸骨棘を触知する：後方もしくは側方より，腸骨棘を母指にて触知し，腸骨に沿って後方へ母指を移動させると触れる突出部である。	②上前腸骨稜を触知する：側方より，腸骨稜を母指にて触知し，腸骨に沿って前方へ母指を移動させると触れる突出部である。
217	1 段落目	大腿骨顆間窩の後内側から起始して～	大腿骨外側顆の後内側から起始して～
260	課題 3	靱帯による関節運動の制動	図 3　靱帯による関節運動の制動
270	下から 16 行目	顎関節は，下顎骨関節結節の下顎頭と～	顎関節は，下顎骨関節突起の下顎頭と～
374	最終行	メントが増大すると考えられる。	メントが増大すると考えられる（図 11b，c）。
376	上から 6 行目	には，筋活動は他に比較して小さい。	には，筋活動は他に比較して小さい（図 12b，c）。
379	図 3 中央 膝関節のグラフ	グラフの起点の誤り	p367 図 3 右上 膝関節のグラフと同様のグラフ入る
503	図 4 説明 最終行	～相で活動がみられれる。	～相で活動がみられる。
504	上から 10 行目	両脚ともに第Ⅴ相では，立姿姿勢を保持するために～	両脚ともに第Ⅴ相では，立位姿勢を保持するために～
554	上から 2 行目	様突起（および後頭骨）に停止する。	様突起（および後頭骨）に停止する（図 6a）。
554	上から 9 行目，10 行目	～から起始し（図 4b），第 1 肋骨～	（図 4b）削除
554	上から 11 行目	第 2 肋骨に停止する。	第 2 肋骨に停止する（図 6b）。

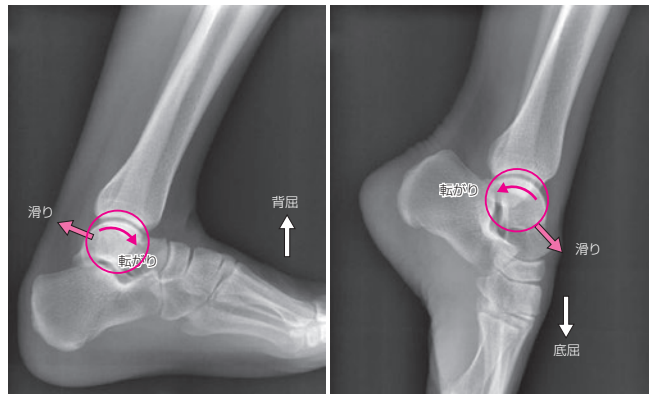
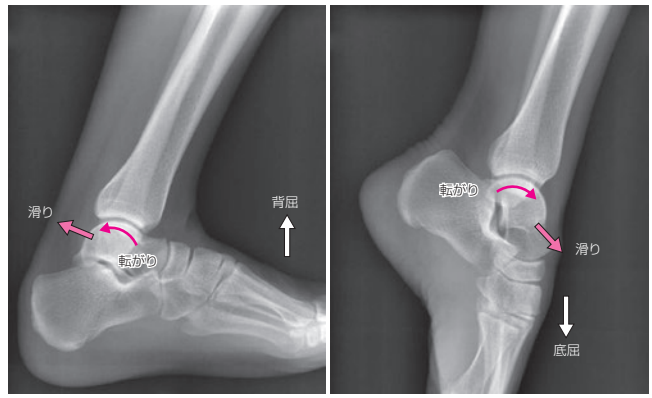
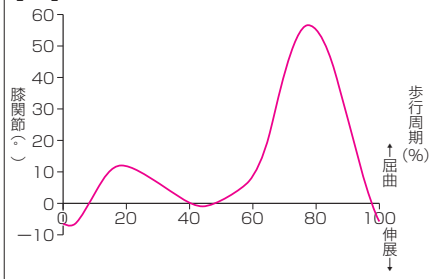
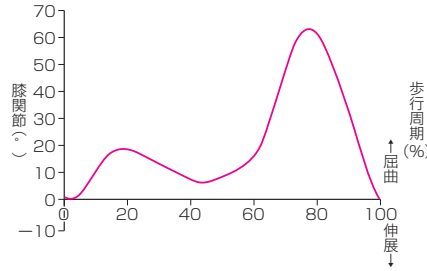
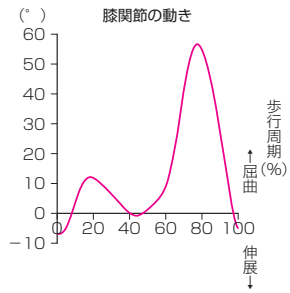
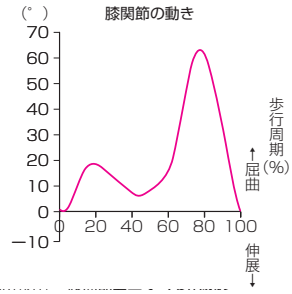
正誤表

「PT・OT のための運動学テキスト 基礎・実習・臨床」【第 1 版第 1 刷．2015 年 2 月 10 日発行】に誤りがございました。下記の通り訂正し，お詫び申し上げます。

2016 年 1 月 20 日　金原出版株式会社

ページ	位置	誤	正
27	上から 1 行目	・遠心性収縮（240°/秒）による膝伸展筋トルク	・遠心性収縮（60°/秒）による膝伸展筋トルク
182	上から 1 行目	転子間稜は大腿骨前面で大転子と小転子を結ぶ骨の隆起である。	転子間稜は大腿骨後面で大転子と小転子を結ぶ骨の隆起である。
182	上から 2 行目	大腿骨後面にある転子間線は関節包の停止部である。	大腿骨前面にある転子間線は関節包の停止部である。
182	下から 4 行目	下部線維束は転子間稜の下部外側に付着する。	下部線維束は転子間線の下部外側に付着する。
200	下から 2 行目	膝関節伸展位に比べ，屈曲位の方がより伸張されるためであることを理解する。	膝関節屈曲位に比べ，伸展位の方がより伸張されるためであることを理解する。
206	上から 7 行目	(wadding gait)。	(waddling gait)。
228	図 4 b.	外反	内反

ページ	位置	訂正内容
231	図 8	図中の矢印が異なっておりました。正しい図は以下をご覧ください。 【誤】  【正】 

ページ	位置	訂正内容
248	図 7	図中の矢印が異なっておりました。正しい図は以下をご覧ください。 また，文献が抜けておりました。 【誤】  a. 背屈　b. 底屈 【正】  a. 背屈　b. 底屈 （小柳磨毅 編：実践 PT ノート 運動器傷害の理学療法 第 2 版．p158，三輪書店，2011. より改変）
367	図 3 膝関節のグラフ	グラフの起点に誤りがございました。正しい図は以下をご覧ください。 【誤】  【正】 
375	図 12　膝関節の動き	グラフの起点に誤りがございました。正しい図は以下をご覧ください。 【誤】  【正】